

2021年12月12日(降臨節第3主日C年)牧師メッセージ

「日常の中で、隣人を愛する」

(ルカによる福音書3:7-18)

司祭ヨセフ太田信三

アドベントクランツのピンク色のロウソクに火が灯されました。降臨節第三主日である今日は伝統的に「ローズサンデー」「喜びの主日」と言われます。この「喜びの主日」は、ローマ・カトリックでミサの始めの「主にあって いつも喜べ」という入祭唱からきています。本日の使徒書で読まれた、フィリピの信徒への手紙でのパウロの言葉「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。」からとられた言葉です。本日の福音書で洗礼者ヨハネがその到来を予告した救い主が、すぐ近くに来ておられる、という喜びの雰囲気の中で礼拝を献げるという伝統のある主日です。

今日の使徒書で「喜びなさい」と言ったパウロですが、実はこの時、獄中にいました。当時キリスト教徒は迫害され、パウロも捕えられ、いつ死刑が宣告されるかも分からない、そういう境遇にありました。そのような中でパウロは手紙を記し、「喜びなさい。」と言ったのです。なぜでしょうか。そして、なぜそのような境遇でそのようなことが言えたのでしょうか。それは、パウロが本当に信じられる救い主に出会ったからです。パウロは、使徒言行録に記されている通り、救いを求め、さまよい続けた人間でした。そのために激しくキリスト者を迫害までしました。そればかりか、主イエスの殺害にまで関与したのです。しかし、そのパウロに復活のキリストが現れ、救いを求めて暗闇をさまよい続けたパウロは、まことの救い主イエス・キリストに出会ったのです。それはもう、どんなに嬉しかったことでしょうか。「もう自分は救い主を探してさまよう必要はない！わたしにはイエス・キリストがいるんだ！」この喜びに与ったパウロだからこそ、獄中であっても喜ぶことができたのです。主イエスによって確かにわたしは救われた！ここでも、どこでも救い主を証できる。そのために働ける、こんな喜びない。パウロは主イエスに出会った喜びに満たされて、「喜びなさい」というのです。

救いを求めてさまよっていたのは、パウロだけではありません。今日の福音書でヨハネのもとに集った人々も同じでした。「私たちはどうすればよいのですか」というヨハネへの人々の問いは、人々の救いを求める叫びです。パウロと同じように、彼らも救いを求めていたのです。当時のイスラエルは、ローマの支配下にあって、民族的な誇りを失い、社会は不正がはびこっていました。厳しい苦境の中にあったユダヤの人々は、自分たちではもうどうにもならない、という暗闇を暮らしていました。人々は光を求めてさまよい、この人が来るべきメシアなのではないかとヨハネのもとに集いました。

その群衆のなかには、徴税人や兵士もいた。彼らはイスラエルの中でも、支配国ローマの手先とされている人々であり、嫌われ者でした。その彼らの「わたしたちはどうすればよいのか？」という問いには、「支配者の手先となって威張っているような、こんなわたしたちであっても、悔い改めて救われるのでしょうか」という気持ちが込められています。ヨハネの存在は彼らに一筋の光をもたらしたのです。

「蝮の子らよ！」というヨハネの強烈な説教に心動かされ、自分の生き方を反省した彼らは、生活の劇的な変革が求められることを予想したでしょう。しかし、ヨハネの答えは拍

子抜けするほど平凡なものでした。「荒れ野に出なさい！」ではなかったのです。「二枚ある人は一枚分け与えなさい」、「規定額以上を取り立てるな」、「ゆするな、自分の給料で満足しなさい」…このような日常の当たり前のことをヨハネは伝えました。つまり、隣人を愛する、ということの日常での実践をこそ求めたのです。自己中心的な欲望、自分さえ良ければ他者から巻きあげて良い…そういう生き方ではなく、日々の中で「隣人を大切にすること」の実践をヨハネは求めたのです。先週の説教でも申し上げましたが、主イエスの十字架のお姿が示すように、愛することには実践が伴うのです。しかしその実践は、決してだいそれたことばかりではないのです。そうではなく、むしろ日常での実践、それは小さなこととも思えることかもしれない、しかし、隣人を愛するという思いから出てくる実践こそが求められているのです。ですから、教会で世界のために祈っていながら、実際の生活では、身近な人に不寛容であったり、無関心であるという生き方は、違う、ということです。

自己中心的な思いから離れ、自分ひとりの救いを求めるのではなく、隣人と共に、神さまによる救いを待ち望むのが神の民です。ヨハネはイエス様の道備えのために来ました。ヨハネは人々の自己中心的な思いを取り除き、それぞれのうちにイエス様をお迎えする場所を備えるためにきました。信じることは必ずしも日常を捨てることではありません。そうではなく、自己中心的な欲望や思いから離れて、隣人を大切にすることなのです。自己中心的な思いを、自分の中からどかし、そこに来るべきイエス様をお迎えする。イエス様がわたしたちの内に来てくださるなら、わたしたちは自己中心的に生きるのではなく、他者を愛し、他者と手を携えながら生きることができます。そうすることで、神さまが望まれる平和への歩みをする事ができるのです。

だれにもパウロと同じ、獄中であっても喜ぶ、その喜びが用意されています。なぜならわたしたちにも、主イエスがおられるからです。わたしたちはすでに、パウロが出会った救い主と出会っているからです。ですから、私達は救いを求めてさまよう必要はないのです。今日、喜びの主日にあってあらためて、わたしたちにもまことの救い主、イエス様がいてくださることの喜びを感じましょう。そのために、ヨハネの叫びを聞きましょう。そして、自己中心的な思いを離れ、イエス様をお迎えするのです。そうして、日常で臨時を愛することを実践する、そういう生き方へと変えられましょう。わたしたちが隣人を愛していき、平和への歩み、イエス様と共にある歩みを喜びながら歩むことができますように。わたしたち一人ひとりの内に、イエス様をお迎えする場所を備え、来るべき日、それぞれの内にイエス様をお迎えして、心からの喜びを隣人と分かち合いながら、来たるべき日を迎えることができますように。